

# 太宰府の文化財

413

## 陣ノ尾1号墳の副葬品



陣ノ尾1号墳出土遺物

陣ノ尾1号墳は、国分小学校の麓にある6世紀末頃に築かれた古墳です。直径約12mの円墳で、古墳の内部には大きな石を使って築かれた横穴式石室があります。石室は開口しており、現在もその様子を見ることができ、発掘調査時にはすでに盗掘を受けていました。副葬品が出土しています。今回はこの古墳から出土した副葬品をいくつか紹介します。

「土器」①、②は須恵器という焼き物です。とても硬く、青灰色をしているのが特徴です。①は坏という供膳具で、蓋と身がセットになります。②は平瓶または横瓶といい、水や酒を入れたと考えられている貯蔵の器です。

「鉄製品」③は鉄鎌です。左端が鎌の先端になります。いくつかの鉄鎌には糸で巻かれた痕跡が残っているものがあり、柄に装着する際、固定させるために巻いたものかも知れません。④は鈎具という馬具の金具の一つです。現在のベルトのバックル部分にあたります。

「装身具」⑤は耳環という当時のイヤリングです。銅に金箔を張り付けた金銅製で、大きさは3cm前後、5〜7mmの厚さがあります。一部金箔が剥がれ青色の錆が見えますが、残りの良いものは現在も黄金色の輝きを見せています。

これら副葬品は考古学研究によって、いつ頃のものかおおよそわかります。例えば、須恵器の坏の形や大きさは6世紀末頃のものと考えられます。この頃は一般的に鉄鎌が大型化していく傾向にあることがわかっ

てきています。また、古墳の多くに鉄鎌が副葬されるようになります。このように、陣ノ尾1号墳の副葬品も古墳時代後期の特徴を示すものとなっています。

陣ノ尾1号墳の被葬者については、国分を見渡せる位置にあることから、この周辺地域との関連がある人物と推測されます。副葬品からは、残念ながら古墳の被葬者を特定できるものは見つかりませんでした。この地域には、武器・馬具・装身具などを手にすることができるといえる人物がいたようです。

文化財課 中村 茂央

### お知らせ

文化ふれあい館では、太宰府の原始から現代に至るまでの歴史を展示した「まるごと太宰府歴史展2019」を開催しています。今回紹介した陣ノ尾1号墳出土の副葬品も展示しています。この機会にぜひ、文化ふれあい館までお越しください。

開催期間…11月3日(日)まで